

内的体験をめぐって（前）

吉田 裕

1. 内的体験を位置づける

第二次大戦は、1939年9月、ドイツ軍がポーランドに侵入して始まるが、それから6年の間、ヨーロッパは深い恐怖と苦悩のうちに置かれる。恐怖と苦悩は全体を覆い、誰もそれを好むことはなかったとしても、その中で人間の持つある種の極度の姿、かつて経験されたことのない人間性の様相が経験される。この経験は少数の人々の上に集約的に委ねられる。私たちが今人間の異様な姿、だが真実の姿を知り、同時にこの時代を知ることができるのは、こうした人々の経験を反芻することによってである。私たちは、こうした人びとのうちの一人にバタイユを数えることができるだろう。彼は 私の苦悩に勝る苦悩があるうか？ と書いたが、彼が書いたものを辿ってみれば、それは正直な告白だったに違いないことがわかる。この苦悩は、この戦争の時期に頂点に達した。苦悩は戦争という時代と社会の動きに強く呼应し、彼の書き残したものを辿っていくと、この動きに応じる彼の思索と試行の振幅の大きさが私たちに見えてくるが、その抜き差しならぬ姿は、私たちを打たずにはおかない。

戦争が始まったとき、バタイユは何をしていたらうか。わかっているかぎり言えば、彼は、一方では、彼にもっとも緊急な問題であった宗教的な探求において、つまり「アセファル」の試みの延長上では、「死を前にしての歓喜の実践」に続けて、「反キリスト教徒のための心得」を書こうとしていた。他方では、すでに38年前後から『有用性の限界』の表題で、経済的でもあれば同時に哲学的でもある著作を計画し、かなりの量を書いている。彼が生活の困難のうちにあっても、経済学や社会学が担うような基礎的な部分への関心と探査を失わなかったことは、記憶しておく必要がある。さらに戦争の始まりに応じて、彼は日々覚え書をつけ始める。それは日記だが、彼は戦争の期間をほぼ通じてこの

日記を書き続け、それらのうち 39 年 9 月から 43 年 5 月までの分は、のちに『有罪者』として刊行され（44 年）、ついで 44 年 2 月から 8 月の分が『ニーチェについて』のなかに収録される（45 年）。

この時期、彼の思索と試行は、このように大きな振幅を見せている。この振幅に関しては、私は『有用性の限界』を読むことで、ある程度その大きさを確かめ得た⁽¹⁾。しかしながら、この大きさを納得すると、今度はその集約点となっている部分を明らかにしたいという願望が浮かび上がってくる。バタイユの探求は、この広がりや集約を繰り返して辿り、そのたびに新しい様相と深い陰影を見せる。この反復を知らなければ、様相の新しさと陰影の深さを理解することはできない。同時に、彼の集約点は、反復の中からいっそう明確に浮かび上がってくる。集約点とは、言うまでもなく、彼が内的体験と呼んだものである。

内的体験という考えはどのようにして現れたのか。戦争の開始から一年ほどたったとき、彼は突然、娼婦を通しての見神の物語である『マダム・エドワルド』を書く。それは、経済学と日記に支えられつつも、エロチックな物語だけが持つ衝撃力によって、それらを内側から突破してしまうようなテキストだった。ついで、そのような物語を書くことを通して、それに匹敵する強度を持った異質なテキストが生まれてくる。それは至福感はどのようにして現れてくるのか、という問い、苦痛はどこかで恍惚へと通じているという経験をめぐる考察だった。この主題は、彼においてはすでにずっと以前から直観的に与えられていたにちがいないが、それでもなおいくつかの経験とその反省を必要とした。バタイユはこのテキストに「刑苦」(suppliceとは処刑あるいはその際の苦痛を指す⁽²⁾)という表題をつける。彼は「アセファル」の最後の集会の際に、自分を供犠に付すように申し出たことがあったが、「刑苦」の追求はこの申し出の延長上にあっただのもあろう。そして苦痛と恍惚のこの同一性を核とし、そしてこの核を外的な要素にすり替えることを拒否したとき、「内的体験」という言葉が浮かび上がってきたのである。

彼はこの言葉に、その来歴と意義に関する考察を加え、その表現そのものを標題とする書物を 43 年に刊行する。それが書物としての『内的体験』である。これはエロチックな小説の匿名での出版を別にすると、彼の最初の書物だった。だが読者は、一読して、その破天荒さ、強靱な探求に打たれるだろう。彼の書

いたものは、それまででもいずれ劣らぬ破天荒さを備えていたが、『内的体験』は別格である。読者は、そこでバタイユが確かに彼の生涯のある絶頂にいるのを疑うことができない。彼は執拗に強靱に思考する。しかし同時に、読者はなお、そのように強靱な意志をも苦もなく押し流す、ある恐るべき動的な力の作用をも、至るところで感じることだろう。彼がある種の崩壊の中にいることも否定できない。そのことも含めて、この書物は、そして「内的体験」という考えは、バタイユの著作の中でもっとも問いかけてくることの多いものだ。では内的体験とはどんなだったか。よく知られている箇所だが、そして冒頭の「序論草案」と題された章の中にあるために、最初に読まざるを得ない箇所だが、バタイユは次のように言っている。

私は、内的体験とは通常神秘体験と呼ばれているものだ、と言いたい。すなわち恍惚の、法悦の、少なくとも瞑想による強い情動の状態である。しかし、私は、今日まで人々の固執してきた信仰告白の体験ではなく、赤裸の体験、なんであれ信仰告白に縛られず、またそこに源泉を持つこともない体験のことを考えている。そのゆえに、私は神秘的という言葉を好まない。⁽³⁾

これを読むと、内的体験とは神のないところでの神秘経験である、という命題がすぐさま引き出されるかも知れない。この命題は間違っているわけではない。彼がこの経験を追求してきた経緯には、確かにキリスト教的な信仰生活についての知見があったし、それとの関係において彼の体験を見ようとすると、こうした定義を引き出すことにも理由はあるからだ。だがそれ以後彼が追求したのは、引用の後半にははっきりと述べられているように、信仰告白に縛られることのない体験である。事実、私がこの書物を初めて読んでからずっと惹かれ続けてきたのは、荒々しくだが厳密に語られる体験の姿だった。この書物は絶望の物語である⁽⁴⁾と彼は言う（序文）。経験は、少なくとも最初は、そのように荒々しく語られるほかなかつたし、さらに信仰告白へと回収されることを拒否するためには、常に荒々しく語られ続けなければならなかつた。だから、私はバタイユの中でもっとも強烈なものであるこうした考えと経験を、性急にある命題へとまとめ上げるのではなく、それがどのようなものであったかを、で

きる限りあるがままの姿で辿ってみたいと思う。

しかしながら、むしろ容易に見えるこの具体的な願いも、実際に行おうとすると、すぐさまいくつかの困難に出会う。「内的体験」は、大きな振幅を示す試行錯誤に先行されているのと同じく、同時的にも、さまざまな迷路やテキストがその周囲に蝟集させてくる。たとえば先ほど挙げたように、日記の類は明らかに「内的体験」を支え、複数の書物『有罪者』『ニーチェについて』を生み出している。それに便宜上日記と言ったが、実際のテキストを見れば、それはいわゆる日記の範囲を大きく逸脱し、「刑苦」に加えてもおかしくないテキストばかりだと言ってよい。加えて、同じ時期に書かれた数多くの詩篇、哲学的、神学的な考察、講演の原稿などが入り込んでくる。バタイユはこれらがひとつの総体をなすことをはっきり意識していた。そして彼は、後年「無神学大全」という名の下にこれらを統合する複合的な書物を構想した。だから、「内的体験」の痕跡を辿ろうとする者は、「無神学大全」へと踏み入らないわけにはいかないのだが、しかしながら、それはいっそう混沌とした大海であって、中に踏み入ると、ほとんど行方知れずにならざるを得ない。誰よりもバタイユ自身、この書物を堅固に構成するということができなかったが、その失敗がこの書物の性格をよく表しているだろう。

では読者には何ができるだろう？「無神学大全」の全体にわたって言及することは、あまりに広範に過ぎる。私はただ、「内的体験」の姿を導き手としてこの混沌を渡ってみたい。とりわけ書物としての『内的体験』を集約的に読みたい。バタイユが数々のテキストを同時に書いていながら、彼の最初の書物をこのようにまとめたことには、少なからざる意味があったに違いないから、読者はそれにしたがってよいはずだ。それに実際に読んでみると、この書物がひとつの集約点であることは、認めざるを得まい。しかしながら、この一冊だけでもすでに、何と多様な書物であることか。そこには戦争が、旅が、幻覚が、語られる。キリスト教批判、企ての哲学への異和、言語への不信が見出される。ヘーゲル、ニーチェ、ブルーストなどは、個別に取り出しうる主題でもある。しかし、私はこれらを逐一主題として取り出すということはない。同様に、これまでしばしば行われてきたようなやり方、つまり、この経験を、たとえばヨガや禅の方法、彼が民族学や人類学から得た知見、またあれこれの哲学談義

と結びつけて理解することもしない。これらの主題が「内的体験」と関わって来ることは当然あるはずで、結びつけのちに必要となることはあるだろうが、私がまず行いたいのは、こうしたさまざまな主題が「内的体験」に向かって収斂するように読むこと、『内的体験』を内部から(しかし同時に、内部とは何だろうかと問いつつ)読みとることである。

2. 『内的体験』という書物

私たちは『内的体験』という書物を前にする。しかしながら、これもすでに単純な書物ではない。先ほど『エドワルダ』が書かれたのちに「刑苦」が書かれたのを見たが、実は二つのテキストの関係は、単に時間的前後関係だけではなく、もっと緊密なものがある。『エドワルダ』は56年に再版され、その時バタイユは、本文に対しては匿名を守ったまま序文を書くが、その序文には草稿があって、そこではもっと赤裸々に、このエロチックな作品の成立とそれが何をもたらしたかが語られている。その冒頭部に「刑苦」との関連について触れた次のような記述がある。

私はこの小さな書物を、1941年の9月から10月にかけて書き、そのあとすぐ「刑苦」がやってくるのだが、後者は『内的体験』の第二部をなすことになる。二つのテキストは、私の判断では緊密に結びついており、一方なしでは他方を理解することができない。『マダム・エドワルダ』が「刑苦」と一緒になっていないとしたら、それは、ある点で、悲しむべき便宜上の理由からである。もちろん、『マダム・エドワルダ』は、もっと有効な真実性をもって私のことを表現しているのだが、もし最初に淫蕩という鍵を与えていなかったら、私は「刑苦」を書くことはできなかつたろう。しかしながら、私は『エドワルダ』で、ただ、放埒な生活による心神衰弱から来るのではないにしても、少なくとも本来言われる性的トランス状態から来る恍惚とした運動を描きたかったのである。⁽⁵⁾

この草稿中では、バタイユが自分が『エドワルダ』作者であること認める立場で書いていることが見えていて面白いが、この方針は 悲しむべき便宜上の理由 から、つまり図書館勤めの立場を慮ばかって、変更され、実名は隠される。一方『エドワルダ』にエロチックな主題を委ねることで、『内的体験』では、

この主題に対する言及は、さほど多くない。しかしながら、この書物でエロチックなものが重要な因子になっていることは、十分に見て取れる。『エドワルダ』が示したものの、すなわち性的な絶頂感が見神体験に結びつくという確信は、内的体験の 鍵 となっている。『内的体験』は、エロチックな経験のうちに発端を持ち、深く身を浸している。これが読者の、少なくとも私にとって一番基本的な導きの糸だ。

私たちはこうして『内的体験』という書物の内部にはいる。すると今度は、この書物の構成の問題にうち当たる。五四年に刊行された現行の『内的体験』では、バタイユは、「無神学大全」を構想していたこともあって、「瞑想の方法」（四六年にある雑誌に「空虚な空を前にして」の題で発表され、翌年単独で刊行されている）を加えているが、この書物は、43年の最初の姿では、「序文」のあとに、第一部「内的体験への序論草案」、第二部「刑苦」、第三部「刑苦の前歴」、第四部「刑苦への追伸」、第五部「双ノ手一杯二百合ノ花ヲ与エタマエ」への全五部から成り立っていた。この構成について、私たちは知り得ることは知っておかねばなるまい。「序文」中で、バタイユは次のように述べている。

この書物のうち、やむにやまれず それだけに私の生に応えつつ 書いた部分は、第二部すなわち「刑苦」と、最終部のみである。他の部分は、書物を構成するという褒むべき配慮のもとに書いた。⁽⁶⁾

『内的体験』はその断章形式が眼を引くけれども、書物を構成するという褒むべき配慮 と言われているように、また、たとえば「刑苦への前歴」が「刑苦」のあとに置かれるなど、構成の上では十分に意図的であることがわかる。「刑苦」を書いたのちに、バタイユは、一方で「前歴」となるものを自分がそれまで書いたものの中から収集し、他方で「追伸」および「序論草案」というかたちで補足と総括を試みる。だが、やむにやまれぬ生の要求に従って書いたと言うもう一つの部分、最後に置かれた詩集の部分については、何時どのような状況で書かれたのか不明である。この点については、全集の後注にも言及がない。

ところで、さらに事情が込み入っているのは、第 部「刑苦への前歴」であ

る。この部分には、それまで彼が書いたテキストのうち、内的体験に関わるものが、小題を付け五つの部分に分けて収録されている。それらは順に、「私は自分を尖塔の上に置きたいと願う」、「死はある意味でひとつの瞞着である」、「青空」、「迷路（あるいは諸存在の組成）」、「交感」である。各テキスト中には、いくつかの日付が記入されている。また、これらのうちあるものについては出自がわかっている。バタイユの遺稿中に第二版への序文の草稿があり、そこでバタイユは『内的体験』の成立について、次のように語っている。

この書物は、パリで1941年の冬の間開始され（それが「刑苦」である）、1942年の夏、プシー＝ル＝シャトーで終えられた。しかし、第三部（「刑苦への前歴」）中の斜字体で書かれた諸テキスト⁽⁷⁾は、それに先行する。ただ最初のものとは最後のものは発表されてこなかった。第二のものは、「供犠」の標題で、アンドレ・マソンのエッチング作品に付して、出された。第三のものは1930年以前と第四のものは、それぞれ、現行の標題のもとに「ミノートル」および「哲学研究」に出た。これらのテキストはすべて、1942年に改変されている。最後に私は、これらの著作のうち一番古いものは、おそらく1926年に遡り、それが公開されて以後、長い間私が経験していない感情を表していることを、明言しておきたい。（私はこのようにして、事実関係に関する誤解を予防しておかねばならない。）⁽⁸⁾

情報を合わせると、明らかになる点もあれば、矛盾が見えてくる場合もある。まず、未発表のままだったという最初のものとは最後のもの、つまり「私は自分を尖塔の上に置きたいと願う」と「交感」は、記述の通り執筆時期は不明で、本文中にも執筆時期を示唆する表現はない。

第二の「死はある意味でひとつの瞞着である」は、右の記述によればマソンの作品に付されたテキストがオリジナルだということだが、この作品とはエッチングによる五点の連作『供犠』である。この連作の展示会は34年6月13日から25日にかけて催された。おそらくこのときバタイユのテキストもすでに出来上がっていたことだろう。ついでマソンの作品とテキストを合わせて、同じ標題で36年になってG.L.M社より150部で出版される。テキスト中には、33年7月という記入がある。そののち、バタイユはこれをかなり書き直して、『内的体験』に収める。

第三の「青空」の来歴は、より複雑である。このテキストは、述べられているように、「ドキュマン」廃刊後にバタイユが活動の場とした「ミノートル」に、36年に発表されたが、そもそもは、政治的動乱に疲れたバタイユが、35年3月にトサ＝デ＝マールのマゾン宅に滞在したとき、マゾンから聞いた挿話が元になっている。その前年やはり政治的動乱を避けてこの地にアトリエを構えていたマソンは、十一世紀創設の有名な僧院のある近くのモンセラータ山に登り、道に迷って一夜を山中に過ごし、星を足下に見るといふ不思議な経験をする。よく知られているように、バタイユは友人のこの経験を、小説の中に取り入れる。この小説は『青空』と題され、滞在中に書き上げられる。同様にマソンは、この経験を二枚の絵（「モンセラータの夜明け」「驚くべき光景」）に描き、珍しいことだが、さらに一篇の詩（「モンセラータの高みから」）を加える。それらと一緒にバタイユもまた、「青空」という今度は哲学的なテキストを書く。ただし、これがどうして1930年以前と言われているのかは分からない。同様に、中途に34年8月という日付の記入があるが、それは疑わしい、とマソンの資料をまとめたルヴァイヤンは言っている⁽⁹⁾。

第四の「迷路（あるいは諸存在の組成）」は、引用の通り、ジャン・ヴァールが主催していた「哲学研究」（35-36年号）に発表される。中に36年2月の記入がある。これもかなり改稿されている。

だが、1926年に遡るといふ一番古いものが、どれを指しているかは分からない。排除法で言えば、期日を推測できない「私は自分を尖塔の上に置きたいと願う」あるいは「交感」が該当するのだろうか。斜字体で書かれた諸テキストはすべての章に含まれているが、それら以外は「刑苦」のあとに書かれたということであれば、バタイユは、『内的体験』に収録するに当たって、元のテキストにかなり大幅に書き加えたということだ。二つの字体は、すでに自分が経験しなくなった感情を区別するためだという。だが、それに留意しつつも、なおいっそう強く私たちを打つのは、42年の段階で、バタイユが自分のこれまでの探求と思考のエッセンスをなす部分を、内的体験についての問いに向けて集約しようとしていることである。

3. 内的体験のはじまり

内的体験とはどんなものだったか。バタイユは最後には、私はその気になれば、意のままに神秘状態に入ることが出来る。いかなる信仰からも離れ、いかなる希望も奪われ、私はこの状態に接近するのに動機を持たない⁽¹⁰⁾（『ニーチェについて』）と言うに至るが、実は彼が具体的に記述している例は、それほど多くない。また彼は、この探求がある種の進展を含んでいることを認めている。例えば、『ニーチェについて』では、ブルーストに触れて次のように述べている。

ブルーストが体験した神秘状態におけるこうした神人融合感（*théopathie*）の性格については、1942年に彼の神秘的体験の本質を解明しようとしていたとき（『内的体験』）には、私はまったく気づいていなかった。あのときは私自身まだ引き裂きの状態に到達したのみだったからだ。最近になってはじめて私は、この神人融合感の中へ入り込んだのだが、この新たな状態の純一さについて言えば、私はすぐさま、禅とブルーストはこれを経験していたのだと、そしてアヴィラの聖テレジアや聖ホアン・デ・ラ・クルスらは最後の段階で体験したのだと考えた『ニーチェについて』（1944年6-7月）⁽¹¹⁾。

この言明に従うならば、内的体験に「引き裂きの状態」から「神人融合感」へという段階があったと言うことになる。この段階付けはそれほどはっきりできるものでないかもしれないが、私はとりあえずは、前者つまり「引き裂きの状態」を出発点とする。そしてこの種の経験を、もっとも遡りうるものから、必要があれば『内的体験』に限定されずに、見てみる。最初に触れたいのは、1920年という記入のある「刑苦」中の一節である。そこでバタイユは、英仏海峡にあるワイト島のクォール修道院に滞在し、松林の静寂さと月光の下で、ある種の法悦を経験したことを語っている。このとき彼は22才、修道士になる道は放棄して古文書学校の学生となっていたが、まだカトリックの強い信仰を保持していた。

月光に加えて、祈りに中世的な美しさが満ちていたおかげで 僧院生活の持つ、私に敵対的なものいっさいは消えてしまい、私はもはや、世界から逃れてこの場所に入り込むことばかりを考えた。私は、僧院の壁の中で、喧噪を逃れて暮らす自分の姿を思い描いた。一瞬、自分が修道士になって、寸断され言説に頼る生から

救出されることを想像した。街路にありながら、暗さに助けられ、血のざわめき流れる私の心は火と燃えたち、私は急激な法悦を知った。⁽¹²⁾

バタイユにおける法悦の経験の明瞭な記述としては、たぶんこれが最初のものでだろう。彼は満ちてくる潮のような突然の高揚に身を委ねている。だがこの経験には、別の伏線を伴っている。ワイト島滞在は、実はロンドンへの調査旅行の帰途であって、このロンドン滞在中で、彼は重要な発見をしている。彼はベルクソンに会い、その機会に『笑い』を読む。後者について、彼は 所説は舌足らずに思われ たという、そして哲学者自身については この小心な小男が哲学者か という侮蔑的な感想を持つのだが、笑いという問題のもたらすものについては深い直観を受け取る。

だが笑いという問題、笑いの久しく隠蔽されたままだった意味は、その時以来、私の眼に、鍵をなす問題となった（この問題は、幸福な笑い、深い内面の笑いにつながっていたが、そのような笑いに自分が取り憑かれていることを、私は即座に理解した）。またそれは何があっても私自身が解かねばならぬ謎であった（この謎は、ひとたび解かれれば、それによっていっさいの問題を解くことになるはずのものであった）。長いこと私は、混沌とした幸福感しか知らなかった。数年してようやく、私はこの混沌 それは移ろいゆく存在の脈絡のなさを忠実に反映しているのだった が、次第に息を詰まらせるほどのものになってゆくを感じた⁽¹³⁾。

彼が予感した笑いの決定的な経験、漠然とした幸福感ではなく、息を詰まらせるような哄笑の経験は、数年後にやってくる。それは「刑苦」の中に叙述されているフル街での経験である。あれから 15 年になると書いているから、1927 年くらいのことになるだろうか。彼はある夜、雨も降っていないのに傘をさして歩いていて、レンヌ通りとフル通りの交差点（これは当時彼が住んでいたサン＝シュルピス街に近い）を渡ろうとしたとき、突然笑いの発作に捉えられる。

私は片手に傘を開いて差していたが、雨は降っていなかったように思う。（私は飲んではいなかった。私は確信をもってそう言う。）私は必要もないのに傘を開いてい

た。（でなければ、後で述べるような必要があったのことだった。）当時私はとても若くて、混沌としていて、意味もない陶酔に溢れていた。不寐で、目の眩むような、それでいてすでに気苦勞と苛酷さに満ち、そして心身を責め苛む思想が輪舞を踊っているようなものだった……。理性のこの難破状態のうちで、不安、孤絶した失墜、怯懦、卑しさが、のし歩いていた。先ほどのどんちゃん騒ぎがまた始まっていたのだ。確かなのは、あの気儘さが、そして同時に、角つき合わせるような「不可能」が、私の頭の中で爆発したということだ。笑いを星の如くにちりばめた空間が、私の前にその晦冥な淵を開いた。フルール通りを横切りつつ、私はこの「虚無」のなかで、突如として未知なるものとなった。……私は自分を閉じこめている灰色の壁を否認し、ある種の法悦状態になだれ込んだ。私は神々しく笑っていた。傘が私の頭に落ちてきて、私を被った（私は故意にこの黒い帷子をかぶった）。私はかつてだれも笑ったことのないようなやり方で笑い、事物はおのおのその奥底を開け、裸形にされ、私はあたかも死者であるかのようだった。⁽¹⁴⁾

これは、『内的体験』の中で、おそらくはもっとも印象が強い一節だろう。クォール修道院での経験から 7 年後のことだが、激しさは月光の下の恍惚感をはるかに上回る。そしてこれは、彼がベルクソンとの接触以来直観していた、笑いの持つ作用の最初の、しかし決定的な経験であった。通りの真ん中で、私は、錯乱を傘の下に隠していたが、自分がそのとき立ち止まったかどうか知らない。たぶん私は飛び跳ねたことだろう（だがそれはたぶん錯覚だ）。私は身を引きつらせつつ啓示を受け、走りながら笑っていたように思う と彼は続けている。この中では、彼の存在を保証していた存在と行為の明晰さと有効性が、疲労と興奮極度の果てに限界を超えて晦冥なものへと身を開いてしまうありさまがとらえられている。

さらに辿っていくと、34 年、これはフランスで右翼の暴動のあった年だが、病を得たバタイユは、春イタリアに旅行し、ストレッサ近くのアルバノ湖の棧橋で、ミサのコーラスを聞いて恍惚を経験する。

そのとき、限りなく壮麗な声、同時に躍動し、自分に確信を持ち、空に向かって叫びかける声が、信じがたいほどに力強いコーラスになって立ち昇ったのだった。それがどこから来る声なのかも知らぬままに、私は即座に烈しい感動に襲われて立ちつくした。拡声器がミサを流しているのだと了解する前に、私は一瞬恍惚となった。（「刑苦への前歴」）⁽¹⁵⁾

次に私たちに知られているのは、ヨガの瞑想から来た経験である。パタイユはそれを最後の著作である『エロスの涙』(1961)で、次のように回想している。

もっと後になって1938年のことだが、一人の友人が私をヨガの実践に導き入れてくれた。私がこの映像の持つ暴力の中に、転倒を引き起こす無限の価値を見出したのは、この機会でのことである。私は今日でも、これ以上に気遣いじみて、これ以上に恐ろしい映像を持っていくことができないが、この映像から出発して、私は完全に転倒され、恍惚感に達したほどであった⁽¹⁶⁾。

この友人とは国立図書館の同僚であったジャン・ブルーノ、映像とは例の刻み切りの刑に処せられる中国人の写真である。パタイユは、この写真に何度か言及している。彼は『有罪者』では、その一枚はあまりに恐ろしく、心臓が止まるほどだった⁽¹⁷⁾と言い、『内的体験』の「刑苦への追伸」では、恐怖で頭髪を逆立て、血で斑になった男を、スズメバチのように美しい⁽¹⁸⁾と言っている。

次に引いてみたいのは、『内的体験』と『有罪者』の両方に記述されている次のよう経験だろうか。この経験は、日記である後者で「1939年9月 - 1940年3月」と記入のある「友情」と題された章に記述されているが、そこから前者の「刑苦への追伸」に転写される。

私は筆を中断せねばならなかった。しばしばそうするように、私は開かれた窓の前に腰をおろした。座るやいなや、私はある種の恍惚に陥った。前の晩はまだ信じ切れずに苦しんだが、今度は、この恍惚状態がエロチックな快樂よりもはるかに強度なものだということを、私はもはや疑わなかった。私には何も見えはしない。そのものは、目にも見えず、感知することもできない。そのものからすれば、死なずにいることは、悲しく、重苦しいのだった。苦悩の中で、私の愛してきたいっさいを私が思い浮かべようとするとき、私は、私の愛が執着してきたあの人目をはばかる数々の現実を仮定せねばならないことだろう。この現実は、まるで、そこに在るものを背後に隠している同じだけの黒雲のようなものだ。魅惑のイマージュは、人を裏切る。そこに在るものとは、完全に、恐怖の度合いにしたがって存在する。恐怖がそれを呼び寄せる。そのものがそこにあるためには、すさまじい騒擾が必要だった。⁽¹⁹⁾

この引用中では、目にも見えず感知できないものの経験が語られ、それはエロチックな快樂よりもはるかに強烈である。そして彼は、光明の中ではなく、夜の闇の中にはいる。ただこれが すさまじい騒擾 と呼応することによって現れていることに注意したい。それは言うまでもなく、戦争のことであって、不安の極でもある内的体験は、戦争という現実と深く呼応している。

『有罪者』の同じ「友情」の章のもう少し後に、瞑想によってもたらされた経験が語られている。彼は森の中を歩いていて、自分が猛禽ののどを引き裂かれる光景を思い浮かべ⁽²⁰⁾、そのあとで次のような経験があったと語っている。

この種の感覚の錯乱は、ほかの錯乱よりも説得力において劣るものだった。私は頭を烈しく振って、激越な恐怖と不安感から逃れ、笑い出したように思う。深い闇の中で、いっさいは明らかに見えていた。帰り路、極度に疲れていたにもかかわらず、通常なら足を挫くような荒い砂利の上を、私はあたかも軽やかな影にでもなったかのように歩いていた。あの時、私は何も求めてはいなかったのに、空は大きく口を開けていた。私は見た、ことさらに精神を鈍化させることによっては見られないものを、私は見た。あの息苦しい、一日の無益な擾乱は、ついに事象の殻をうち砕き、霧散させてしまったのだった。

ここでは恐怖と不安は「笑い」と入れ替わりに、「私」は軽やかな存在となり、事象を覆っていた殻はうち砕かれ、世界は全く別の相貌を見せる。

「刑苦」には、彼の言うところの内的体験を具体的に叙述したものは、引用した部分 といえそれらは時期的には「刑苦」にかなり先立つ 以外にはあまりない。「刑苦」それ自体は、経験についての反省的記述であろう。とすれば私たちは、次に「刑苦」の導く内在的な論理の追跡に踏み入らねばならない。

（続く）

注

- (1) この時期のバタイユの関心の全体を、それまでの彼にとっての関心事であった経済学的関心から眺めた場合については、拙論「謎を解くこと、謎を生きること『有用性の限界』をめぐって」(人文論集第38号、2000年4月、早稲田大学法学部)を参照していただきたい。
- (2) *suppliee* というキーをなす言葉について、覚え書を付しておく。この言葉はもともと処刑を指すが、それは単なる拷問ではなく、人間の過ちに対して神が与える刑罰のことである。語源的には、処刑の前の祈り *supplier* から転じた語であり、後者も『内的体験』中に多く使われ、「嘆願」と訳されている。
- (3) 以下引用は基本に、*Œuvres complètes de Georges Bataille*, éd Gallimard, 1973-1988(全十二巻)による。邦訳がある場合は追記する。この引用については、出典は全集第5巻15ページ、邦訳(出口裕弘訳、現代思潮社、1970年)19ページ。
- (4) 全集第5巻11ページ。前出邦訳13ページ。
- (5) 全集第3巻491ページ。
- (6) 全集第5巻9ページ。前出邦訳10ページ。
- (7) 翻訳はカギ括弧 [] でくくって、この区別をつけている。
- (8) 全集第5巻422ページ。
- (9) マソンの手紙等をまとめた著書『シュルレアリスムの反逆』(André Masson, *Le Rebelle du surréalisme*, éd. Herman, 1976)の解説。
- (10) 全集第6巻61ページ、邦訳(酒井健訳、現代思潮社)では106ページ。
- (11) 全集第5巻160ページ、前出邦訳275ページ。
- (12) 全集第5巻72ページ、前出邦訳138ページ。
- (13) 全集第5巻80ページ、前出邦訳152ページ。
- (14) 全集第5巻46ページ、前出邦訳83ページ。次の引用も同じ。
- (15) 全集第5巻90ページ、前出邦訳175ページ。
- (16) 全集第10巻627ページ、邦訳(森本和夫訳、ちくま文庫、2001年)311ページ。
- (17) 全集第5巻248ページ、前出邦訳64ページ。
- (18) 全集第5巻139ページ、前出邦訳268ページ。
- (19) 『有罪者』については全集第5巻269ページ、前出邦訳64ページ。『内的体験』については全集第5巻142ページ、前出邦訳273ページ。この引用中で注意しなければならないことがある。逐語訳した そこに在るもの の原文は *ce qui est* であって、これは1929年にアンリ・コルバンによって翻訳された、ハイデガーの『形而上学とは何か』から取った表現であるようだ。この表現のドイツ語原文は、*Seiende* であるが、コルバンはこれを *existant* と訳したり、*ce qui est* と訳したりで一定しない。

なお Seinde は、現在のフランス語では *étant* と訳されるが、原語がそのまま使われることも多い。日本語訳(大江精志郎訳、理想社)では、「存在事物」となっているが、現在では通常「存在者」と訳される。この問題については、*Les Intégrales de Philo, Heidegger, Qu'est-ce que la métaphisique, notes et commentaires de M. Fromont-Mercure*, éd. Nathan, 1998 を参照した。コルバンの訳には現在から見ると的確でないところが目に付くが、*Dasein* を *réalité humaine* と訳した問題については、西谷修氏がジャン・リュック・ナンシーの『無為の共同体』(朝日出版社、1985年)の訳注で詳しく紹介している。

- (20) 私は「小鳥の喉を裂く猛禽」のイメージを呼びさました。闇の中で、私は高みの枝々を、猛禽の怒りによって煽られ、私に向かって、充足した私に向かって襲いかかる黒々とした葉叢を想い描いた。その陰惨な鳥は私の上に飛びかかり……私の喉を裂いた、と私には思えた(『有罪者』全集第5巻276ページ、前出邦訳78ページ)

A Z U R

本記事は、成城大学フランス語フランス文化研究会の
機関誌『AZUR』第4号(2003年3月発行)に掲載されました。

成城大学フランス語フランス文化研究会

Société d'étude de la langue et de la culture françaises
de l'Université Seijo

http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/areas/europe/azur_index.html